令和３・４年度特別支援教育体制推進事業

特別支援教育推進モデル事業
中高連携特別支援教育推進校研究委託

小牧市

実 践 報 告 書

令 和 5 年 3 月

愛知県教育委員会

目　　次

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

令和３・４年度　中高連携特別支援教育推進校研究構想図　・・・・・・・・・　2

研究によせて　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

実践報告書
　一人一人の教育的ニーズに応じた切れ目のない支援体制の構築を目指して
　　～小牧市における中高連携の取組～　・・・・・・・・・・・・・・・・　4

＜資料１＞個別の教育支援計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11

＜資料２＞支援情報引継ぎ実施要項　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19

引継ぎの概要（小牧市モデル）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　23

＜参考資料＞
　特別支援教育推進モデル事業　中高連携特別支援教育推進校研究委託実施要綱
　検討委員名簿

はじめに

平成３０年８月に学校教育法施行規則の一部が改正され、小・中学校の特別支援学級の児童生徒、小・中学校及び高等学校において通級による指導が行われている児童生徒について、個別の教育支援計画の作成が必須とされました。このことにより、これまで以上に計画的、継続的な支援・指導が可能となり、個別の教育支援計画は進学先や就職先に確実に引き継がれることで、乳幼児期から就労まで切れ目ない教育支援に生かすことができる重要なツールとなりました。

本県においては、平成２９年度より、個別の教育支援計画の中学校と高等学校との間で引継ぎ方法等を研究し、その成果を学校や市町村教育委員会に周知してきました。また、中学校から公立高等学校への個別の教育支援計画の引継ぎ率を調査してきました。その調査結果を見ますと、引継ぎ率は年々増加してきていますが、令和３年３月に中学校を卒業した、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒の個別の教育支援計画の公立高等学校への引継ぎ率は約５２％であり、まだ半数が引き継がれていない状況です。

一方、令和４年１２月、文部科学省より、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果が公表されました。今回は、初めて、高等学校を調査対象とし、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた生徒の割合は、２．２％という結果が出ました。このことから、小中学校で特別支援教育を受けてきた生徒の指導内容や合理的配慮の状況等を、個別の教育支援計画を活用して高等学校に適切に引き継ぎ、高等学校においても生徒一人一人の障害の状態等を踏まえた支援・指導の充実を図る必要があることがより明らかとなりました。

こうした状況の中、令和３年度からの２か年において小牧市に研究委託をし、小牧市立篠岡中学校及び愛知県立小牧工科高等学校を中高連携特別支援教育推進校として、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒の支援・指導の充実及び支援情報の引継ぎ方法、活用等について研究したことをまとめたものが本報告書です。

本報告書が県内の先生方の指導力向上と中学校・高等学校間の一層の連携強化の一助となり、県内全域で中学校から高等学校に支援情報が適切に引き継がれ、効果的に活用されることを願っています。

令和５年３月

愛知県教育委員会特別支援教育課

令和３・４年度 中高連携特別支援教育推進校研究構想図

障害のある児童生徒等については、学校生活のみならず、家庭生活や地域での生活も含め、長期的な視点に立って幼児期から学校卒業後までの一貫した支援を行うことが重要であることから、各学校においては、個別の教育支援計画について、本人や保護者の同意を得た上で、進学先等に適切に引き継ぐよう努めること。
また、各自治体の関係部局や関係機関等が連携し、就学、進学、就労等の際に円滑に引き継ぐことができる体制の構築に努めること。

平成３０年８月２７日「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の施行について（通知）」（文部科学省）

支援・指導の実際

市町村

○市町村特別支援教育連携協議会の設置・運営
○特別支援教育コーディネーターの資質向上
○特別支援教育支援員等の配置

中学校

○多様な学びの場
○様々な立場、役職に応じた研修
○特別支援学校による地域支援
○個別の教育支援計画・指導計画の作成・活用

高等学校

○地区特別支援教育コーディネーター研修会の実施
○特別支援学校との連携
○特別支援教育支援員等の配置

＜課題＞
①通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒の支援・指導方法の充実
②中学校から高等学校への支援情報の引継ぎと活用

通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒に対する支援・指導の充実及び支援情報の引継ぎ・活用方法の研究

市町村の取組

○研修の実施
○保護者理解への啓発
○中高連絡会等の開催
○特別支援教育連携協議会の企画・運営
○引継ぎに関する指針の策定

中学校の取組

○教員の資質向上
○個に応じた支援・指導の充実
○引継ぎに向けた校内体制の整備

高等学校の取組

○教員の資質向上
○個別の教育支援計画等に基づく支援・指導内容の検討
○支援情報を引き継いだことによる指導の効果検証及び環境整備

○　授業研究会（事前・事後検討会含）、相互授業参観、ケース会議等の開催
○　個別の教育支援計画等の内容及び引継ぎ時期の検討

令和３・４年度特別支援教育推進モデル事業「事業報告書」「引継ぎモデル図」の作成

【市町村における支援体制の一例】
○個別の教育支援計画等の内容の検討及び使用する様式の検討
○中高連絡会の実施
○支援情報を引き継ぐシステムづくり
○関係機関との連絡調整
○保護者への啓発

【中学校、高等学校における報告書の一例】
○生徒の実態と継続した支援
○引き継いだ支援情報等を基に授業で活用した支援の実際
○支援情報を引き継ぐ内容や引継ぎ時期の検討
○連携の実際

研究成果の普及（県主催の各種研修会での報告・情報の共有）

支援情報を引き継ぎ、一貫した支援の充実を図る

令和３・４年度愛知県特別支援教育体制推進事業
特別支援教育推進モデル事業　中高連携特別支援推進校研究委託

研究によせて　ー「人とシステム」で支援のバトンをつなぐー

研究アドバイザー　愛知教育大学　准教授　小倉　靖範

愛知県教育委員会では、平成２９年度より、特別支援教育推進モデル事業として、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒の支援・指導の充実及び支援情報の引継ぎ方法、活用等について、モデル地区を中心に研究を進めてこられました。その中で、令和３年度から小牧市において行われた本事業の研究アドバイザーの依頼を受けたとき、とても意義深い研究テーマであると思ったことを覚えています。

小牧市における本事業では、主に以下の２点について取組が行われました。

○　通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援・指導力の向上
○　中学校・高等学校間の個別の教育支援計画の引継ぎ方法、活用等のシステムの構築

小牧市の先生方とともに本事業に取り組む中で、私自身、支援のバトンをつなぐために大切なことに改めて気づく機会をいただきました。

まず、特別な支援を必要とする児童生徒への支援・指導力の向上では、研修会だけではなく、小牧市立篠岡中学校、愛知県立小牧工科高等学校を会場に、中高合同授業研究会や中高合同事例検討会が行われました。中学校と高等学校の特別支援教育コーディネーターが一堂に会して互いの授業を見合う中で、中学校と高等学校の違いを肌で感じることができました。そして、互いの学校文化を知ることが連携の第一歩となることを確認できました。また、授業参観後のグループ協議では、小牧市の小中学校で取り組まれてきた「学び合う学び」（協働的な学び）が、特別な教育的支援を必要とする生徒にとっても有効であること、中学校や通級指導教室担当の先生方がもつ情報が、高等学校における支援の考える上での重要なヒントとなることが分かりました。そして何よりも、回を重ねるごとに参加している先生方の協議が活発になり、先生方が協議に積極的に参加していたことが一番印象的でした。

また、個別の教育支援計画では、小牧市のこれまでの様式を「引継ぎ」に焦点を当てて見直しました。また、支援情報引継ぎ実施要項や中学校・高等学校間の引継ぎスケジュールを作成することで、「引継ぎ」の方法や時期の見える化に取り組みました。そして、特別支援教育に関する中高連絡会という新たな取組を通して、個別の教育支援計画を活用するための仕組みが整いました。今後は、実際に運用する中で、高等学校において生徒一人一人の教育的ニーズに応じた支援や合理的配慮の提供等が、更に充実することが期待されます。

報告書の中にもあるように、中学校と高等学校の特別支援教育コーディネーターの「顔の見える関係性」は、小牧市の大きな財産です。そして、個別の支援教育計画を活用しながら「顔の見える関係性」を継続するための「引継ぎシステム」も構築されました。支援のバトンがつながり、実際の学校現場において好循環を生み出すためには、この「人とシステム」が両輪となって機能することが何よりも重要です。

最後になりましたが、本事業に関わりました全ての方々、小牧市立篠岡中学校と愛知県立小牧工科高等学校の教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

一人一人の教育的ニーズに応じた切れ目のない支援体制の構築を目指して

～小牧市における中高連携の取組～

小牧市教育委員会

１　はじめに

小牧市は、人口約１５万人（令和４年 10 月現在）である。その中に、市立幼稚園１園、市立保育園等１４園、私立幼稚園８園、私立保育園等７園、こども園２園、小学校１６校、中学校９校、県立高等学校３校、私立高等学校１校、県立特別支援学校（肢体）１校が設置されている。

小牧市では、特別支援教育に関する関係機関との連携を目指し、平成 20 年より特別支援教育連携協議会が設置されている。そのなかで、保健センターで作成した「成長記録」が幼稚園・保育園を経て小中学校に引き継がれ、個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成につながる体制について協議されてきた。また、障害児通所支援の事業所、社会福祉協議会、ハローワークとも連携し、子どもたちへの切れ目ない支援の充実が図られている。

２　研究のねらい

小牧市では、令和元年に小中学校の個別の教育支援計画に関するガイドラインが整備され、作成様式、引継ぎ方法、保存期間などが市内で統一された。これにより、児童生徒の支援情報が小学校から中学校へ引き継がれる、市内統一の引継ぎ体制が確立した。

しかし、中学校卒業後は、生徒の進路が様々であることから、支援情報の引継ぎが個々の判断に委ねられ、実際の引継ぎ率は小学校から中学校の場合と比較すると低く、中学校と高等学校との連携に課題が感じられた。引継ぎをしなかった理由として「もう支援が不要になったから」「進路先で不利になるから」「高等学校では障害があると思われたくないから」などの声があった。一方、引継ぎをしなかった生徒が、高等学校進学後に不適応を起こし、不登校や退学にいたるケースもあった。

こうした現状を踏まえ、教師の指導力の向上を図ると共に、個別の教育支援計画を作成する意義が支援を必要とする児童生徒、その保護者、教員などの支援者に充分に理解され、中学校から高等学校へも確実に引継ぎ、活用される体制を確立すること目指し、本研究を進めることにした。研究では、以下の２点について取り組んだ。

○　通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援・指導力の向上
- 発達障害についての理解促進
- 全ての児童生徒の学びを保障する「学び合う学び」の授業研究

○　中学校・高等学校間の個別の教育支援計画の引継ぎ方法、活用等のシステムの構築
- 縦の連携を強化し、支援を引き継ぐ体制の構築
- 特別支援教育に関する中高連絡会の開催

３　研究の方法

（１）　通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援・指導力の向上を目指して

○　通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援の在り方について、小・中学校と高等学校が合同で研修会を行い、教員の力量向上を図る。

○　中学校と高等学校の教員が一緒になって授業研究や事例検討を行い、適切な支援・指導の在り方を明らかにする。

（２）　中学校・高等学校間の個別の教育支援計画の引継ぎ方法、活用等のシステムの構築を目指して

○　小牧市中高連携推進委員会を設置して、中学校・高等学校間の支援情報の引継ぎの在り方について協議し、引継ぎの時期・方法・内容について市内で統一を図る。

○　特別支援教育に関する中高連絡会を開催し、支援情報を確実に引き継ぐ体制を構築する。

○　事業の成果を報告書及び資料等にまとめ、市内全小中学校及び高等学校に配付し、共有する。また、県が主催する研修において、事業の成果を各学校や各市町村に還元する。

４　研究の実際

（１）　通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援・指導力の向上について

ア　特別支援教育コーディネーター研修会

・　目　的

特別支援教育コーディネーターとしての力量向上を図る。

・　参加者

小牧市内小中学校特別支援教育コーディネーター、小牧市内高等学校特別支援教育コーディネーター、研究拠点校（小牧市立篠岡中学校、愛知県立小牧工科高等学校）校長

・　令和３年度から年２回実施した。内容は以下の通り。

・　令和４年度には、通級指導教室担当教諭との合同研修会も実施した。

<table>
<tr><th></th><th>講師</th><th>内容</th></tr>
<tr><td rowspan="2">令和３年度
第１回</td><td>小牧市こども心の相談室
相談員　山本　順大　氏</td><td>特別支援教育コーディネーターの役割について、質疑応答形式の講義を行った後、実際の事例を挙げてグループ協議を実施した。小中高の連携の重要性について認識を強め、研究の実践意欲が高められた。</td></tr>
<tr><td colspan="2">（参加者の声）
・　中学校入学時に通常の学級に転籍して不適応を起こしたケースを検討し、支援情報の確実な引継ぎや適切な学びの場の選択の大切さを感じた。（中学校）
・　高校は、中学校までと指導体制が異なり、受け入れ体制の違いを感じた。（高等学校）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">令和３年度
第２回</td><td>愛知教育大学
准教授　小倉　靖範　先生</td><td>個別の教育支援計画の作成と活用についての講義後、現在使用している小牧様式の個別の教育支援計画の改善案についてグループ協議した。個別の教育支援計画の作成意義や活用方法について考えることができた。</td></tr>
<tr><td colspan="2">（参加者の声）
・　子ども自身が自分の教育支援計画を作成するのが理想という話を聞き、子どもが自分を見つめ直すよい機会になると思った。（中学校）
・　個別の教育支援計画の様式は、より具体的な内容が得られるようなものにして、市内で共有できるとよい。（高等学校）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">令和４年度
第１回</td><td>小牧市通級指導教室担当
教諭　服部　敬子　先生</td><td>個別の教育支援計画と指導計画の違いと関係、それぞれ作成の手順、合理的配慮の具体例など実際の事例を挙げながらの講義を聞き、特別支援教育コーディネーターとして関係機関にどう支援をつなぐかを検討した。</td></tr>
<tr><td colspan="2">（参加者の声）
・　支援が必要な生徒に対して、具体的にどんな指導・配慮をしたらよいのか悩むことが多い。一人で抱え込まず、必要に応じて専門家につなぐことが大切と分かった。（中学校）
・　通級指導教室での指導について話を聞き、中学校までの支援の様子が分かった。（高等学校）</td></tr>
<tr><td>令和４年度</td><td>小牧特別支援学校
地域支援部
教諭　児玉　珠美　先生</td><td>小学生児童の事例を取り上げてインシデントプロセス法による事例検討を行い、講師より特別な支援が必要な子・保護者への対応策や自立活動について学んだ。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td>通級指導教室担当合同研修会</td><td colspan="2">（参加者の声）
・　よく似た事例が高校でもある。本人の状況が少し分かってきたので、不安感を受け止め、自分の意思で動けるようサポートしたい。（高等学校）
・　インシデントプロセス法により、どんな質問が解決策の検討に必要か分かってきた。講師の先生のお話で、具体的な支援策について見識を深められた。（中学校）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">令和４年度
第２回</td><td>愛知県医療療育総合センター
中央病院　小児心療科
医長　小野　真樹　氏</td><td>「発達障害の理解とその対応」についての話を聞き、高等学校の生徒の仮想事例についてディスカッションした。学校に求められる役割について理解が深められた。</td></tr>
<tr><td colspan="2">（参加者の声）
・　困りごとの理由を考えたときに、「苦手さ」と感情のコントロールの関係から理解することが必要だと分かった。（中学校）
・　小野先生の話で、診療で出会った若者の事例（TikTok で過剰服薬の情報を手に入れるなど）が参考になった。自分の年齢が上がるにつれて、生徒の感覚も遠くなりがちなので、最新の情報を理解できるような機会はありがたい。（高等学校）</td></tr>
</table>

イ　小中高合同発達障害研修会

・　目　的

発達障害についての理解を深め、具体的な支援方法を学ぶ。

・　参加者

小牧市内小中学校特別支援教育コーディネーター、小牧市内高等学校特別支援教育コーディネーター・養護教諭

・　内　容

本研修は、小牧市夏季教職員研修として毎年実施しており、令和３、４年度は研究の一環として中高連携推進委員である高等学校の先生方も参加した。講師として武庫川女子大学の石川道子先生を招聘し、「発達障害を理解して支援につなげる」という演題の講演を聞いた。発達障害児の特性と具体的な支援方法について事例を挙げながらお話しいただき、義務教育期間中にどのような力をつけておくべきか認識を深めることができた。

（参加者の声）
・ ケースバイケースの対応が必要で難しさを感じるが、特性や行動の背後にある理由を知ることで、適切な指導、配慮につながると分かった。
・ 支援、指導する大人の冷静な対応、観察の大切さを改めて実感した。
・ 大人になった発達障害事例から、幼児期、学齢期の影響の大きさを実感した。

ウ　中高合同授業研究会

・目　的

通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への指導の充実を図る。

・　参加者

小牧市立篠岡中学校長、県立小牧工科高等学校長・教頭、小牧市内中学校特別支援教育コーディネーター、小牧市内高等学校特別支援教育コーディネーター・養護教諭、通級指導教室担当教諭

【グループ協議後の意見共有の様子】

・　内　容

篠岡中学校にて、公開授業の参観と研究協議会を行った。

令和３年度は、新型コロナウィルス感染症対策のため、研究協議で取り上げる授業は動画で視聴し、研究協議を行った。研究協議会では、抽出生徒（場面緘黙）を中心に、生徒同士の関わり、教師の支援方法などが話題になった。小牧市で取り組む「学び合う学び」の授業実践が特別な支援を必要とする生徒の指導に有効であること、生徒の実態に応じた個別の支援を行うために、個別の教育支援計画を有効活用する重要性などが確認できた。

（参加者の声：中学校）
- 場面緘黙の生徒への対応方法（グループ構成の配慮、声掛け、タブレットの利用など）について学ぶことができた。一人も漏らさず救おうとする授業作りや学級経営の大切さを改めて感じた。
- 個別の教育支援計画をもっと活用すべきだと思った。

（参加者の声：高等学校）
- 中高という縦並びの形での授業研究会は少なく、貴重な会だった。今後、広がりがあるとよいと思う。
- 個別の教育支援計画のある生徒との関わり方という視点で授業を見ることができ、自分自身の学びになった。

令和４年度は、教室内の参観者数を絞るため２グループに分かれ、３年技術と１年美術の授業を参観し、研究協議を行った。抽出生徒が各クラス１名いたが、個別の教育支援計画・指導計画の活用により、その生徒の課題に視点を当てながら参観・協議を進めることができた。特に３年の授業では、抽出生徒の特性が顕著に表れる場面があったが、周りの生徒に理解があり、適切な距離感で関わる様子が見られた。協議会では、どの生徒も安心して学ぶことができる環境が、学びの質を高めるという意見が聞かれた。

（参加者の声：中学校）
- クラスの雰囲気がよく、同じグループの友達と関わる中で学びを深めていた。
- 高校の先生の話を聞くことで、様々な生徒がいる環境が、互いに助け合う関係を築くことに繋がっていると認識することができた。

（参加者の声：高等学校）
- ９年間を共に過ごすことで、まわりの生徒と調和が生まれると感じた。高校に入ると、新しい人間関係づくりになるが、自力で困難を乗り越えるためのコミュニケーション力が鍵になると思う。
- 声に出して思考を整理する様子が見られたが、自分でメモして整理する力がつくとよい。

エ　中高合同事例検討会

・　目　的

通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への指導の在り方について検討し、指導力の向上を図る。

・　参加者

県立小牧工科高等学校長・教頭、小牧市立篠岡中学校長、小牧市内中学校特別支援教育コーディネーター、小牧市内高等学校特別支援教育コーディネーター

・　内　容

県立小牧工科高等学校にて、１年生の授業参観を行った後、インシデントプロセス法による事例検討会を行った。令和３年度の事例検討会では、生徒の情報共有のため個別の教育支援計画・指導計画を活用した。また、グループ編成を、それぞれの生徒の中学時代を知る教員か

ら情報が得られるように工夫した。参加した先生方のふり返りには、個別の教育支援計画・指導計画の有効性や直接対面して情報交換する場の必要性についてふれたものが多かった。

（参加者の声：中学校）
- 中学校と高等学校の教員が一緒に考えていくことで、解決策等のアイディアが生まれた。書類の文字だけでは伝わらない部分もあるので、連絡会等で直接話ができる場ができるとさらによいと感じた。
- 高等学校へ送る支援情報に、どんな項目が必要なのかが少し分かった。本人の特性に応じた進路選択の大切さを改めて感じた。

（参加者の声：高等学校）
- インシデントプロセス法により、問題の本質がはっきりし、議論がしやすくなった。特定の生徒を見ることで、対処法を具体的に話し合うことができた。
- 県立小牧工科高校の「個別の指導計画」は、全教員で共有できるものになっていて、参考になった。

令和４年度は、参加者がインシデントプロセス法の事例検討会に慣れてきたため、話し合いが円滑に進んだ。また、事例として取り上げた生徒との関わりが深い小中学校の通級指導教室担当教諭も協議に加わり、過去の指導に基づく意見が出されたことで、より生徒理解が深まり、広い視野にたち事例検討を行うことができた。このような中高合同で話し合える会を、今後も継続してほしいという感想が多く聞かれた。

（参加者の声：中学校）
- 他の中学校、高校、通級指導教室担当の先生方と様々な事例について話し合いを深めることができ、有意義だった。
- 対象生徒の具体的な背景情報やその子の良さを念頭に置くとよい対策が出やすいと改めて感じた。
- 中学校でしてきたことを伝えたが、それが高校で実現できるのか、押しつけになっていないか、不安になった。

（参加者の声：高等学校）
- 個別の教育支援計画の有効性を実感した。非常に大きな「資源」を３、４月の狭間に消失しないよう、引継ぎできるとよい。
- 自校の生徒についても中学校の先生方から話を聞きたかった。今後もこのような会が持てるとよい。
- 卒業生を把握している中学校の先生方にひきかえ、高校の立場だと、（他校の事例については）生徒の見方が難しかった。

【Ｒ４年度事例検討の様子】

（２）　中学校・高等学校間の個別の教育支援計画の引継ぎ方法、活用等のシステムの構築に関する取組について

ア　中高連携推進委員会の開催

・　目　的

中学校・高等学校間の個別の教育支援計画等の引継ぎの在り方について協議し、市内統一のガイドラインを策定する。

・　参加者

小牧市立篠岡中学校長、県立小牧工科高等学校長・教頭、小牧市内中学校特別支援教育コーディネーター、小牧市内高等学校特別支援教育コーディネーター・養護教諭

・　内　容

事業計画等を協議するなど研究推進の役割を担い、中学校・高等学校間の個別の教育支援計画等の引継ぎの在り方について検討した。市内統一のガイドラインとなる「引継ぎ情報実施要項」を策定し、個別の教育支援計画の「小牧様式」を見直し、新様式について協議することができた。

主な協議事項

【令和３年度】

第１回　特別支援教育推進モデル事業の令和３年度の取組について

第２回　個別の教育支援計画の「小牧様式」の見直し

第３回　支援情報引継ぎ実施要項について、個別の教育支援計画の新様式について

【令和４年度】

第１回　特別支援教育推進モデル事業の令和４年度の取組について

第２回　個別の教育支援計画の「小牧様式」変更点について

支援情報引継ぎ実施要項の実施に向けて

第３回　特別支援教育推進モデル事業の成果と今後の方針について

イ　小牧市中高連絡会

・　目　的

切れ目のない支援の充実を図るため、中学校から高等学校へ支援情報の引継ぎを行う。

・　参加者

小牧市立篠岡中学校長、県立小牧工科高等学校長・教頭、小牧市内中学校特別支援教育コーディネーター、小牧市内高等学校特別支援教育コーディネーター・養護教諭

・　内　容

個別の教育支援計画等の紙媒体だけでは、充分伝えきれない情報を伝達する場として設定した。あらかじめ、中学校が情報提供を希望する生徒を該当高等学校に伝え、事前に情報収集して参加してもらった。当日は、４グループに分かれ、ローテーションにより４人の高等学校教諭と情報交換ができた。参加者からは、対面で情報交換できるメリットから今後の継続を望む声が多く聞かれた。一方で、開催時期、参加メンバー、他の連絡会（生徒指導連絡会）との兼ね合いなどの課題も指摘された。

＜中学校の教員の感想＞

・　中学から高校へ、情報を細かく伝える場がなかったので、この連絡会はよい機会であった。中学からの情報が、高校での指導、対応の参考になるとよい。

・　年度が替わってからの開催のため、担当教員の異動があり卒業生の情報を得にくい場合がある。

＜高等学校の教員の感想＞

・　「無事にやっていますよ」と伝えた際、中学校の先生が自分のことのように喜ばれていたのが印象的。来年度以降も継続して、積極的に情報交換を行っていきたい。

・　個別の教育支援計画を引き継ぐ生徒が少ない学校は、特別支援教育に関して関心が低くなりがちで、共通理解が難しい。

５　成果と課題

（１）　研究の成果

ア　支援・指導の充実、指導力の向上に関して

本研究では、各校の特別支援教育コーディネーターが様々な研修会を通して、特別支援教育に関する理解を深め、個別の教育支援計画を活用して個々の特性に応じた支援を行うための力量を高めることができた。また、市内の中学校、高等学校が校種を超えて互いの授業を参観したり、共に協議したりする中で、特別支援教育に関する連携推進に向けて意欲が高まったのではないかと思う。

イ　個別の教育支援計画の引継ぎ方法、活用等のシステムの構築に関して

中高連携推進委員会で個別の教育支援計画の小牧様式について取り上げ、作成の目的・意義、必要な情報などを協議することで、新小牧様式（資料１）を完成した。令和５年度作成分から、新小牧様式に移行する予定である。主な変更点は、次の通りである。

- エクセルで作成することで、ページの追加や計算式の活用ができるようにした。また、記入する時期（作成時、年度初め、年度末まで）により、ページを分けた。
- 児童・生徒に伝わりやすい言葉を使い、本人の良さを記入する欄を増やした。
- 毎年更新するページは、できるだけシンプルにして、様々なケースに対応して記述できるようにした。
- 次年度に向けて引継ぎ事項の欄を設け、今後の支援目標、支援内容等の記録が残せるようにした。
- 年度末の保護者の確認欄に引継ぎについて記述し、確認をとりやすくした。

個別の教育支援計画等の引継ぎは、小学校・中学校間、中学校・高等学校間で共通のガイドラインである「支援情報引継ぎ実施要項」（資料２）を策定し、引継ぎの時期や方法の市内統一を図ることができた。令和３年度末には、この「支援情報引継ぎ実施要項」に沿って引継ぎを行うことで学校間のばらつきをなくし、中学校・高等学校間の引継ぎ率を向上させることができた。

ウ　特別支援教育に関する中高連絡会に関して

特別支援教育に関する中高連絡会の開催は、紙媒体だけでは不十分な情報のやりとりをするよい機会となった。中学校・高等学校の教員が直接交流することは、支援のネットワークが広がることにつながる。本研究で築いた中学校・高等学校の特別支援教育コーディネーターの「顔の見える関係性」は、貴重な財産となったと思う。

（２）今後の課題

本研究では、個別の教育支援計画等の引継ぎのため、「支援情報引き継ぎ実施要項」及び「小牧市中高連絡会」という小牧市としては２つの新しい取組みを行った。この２つの「種」を、今後大きく育て実らせるためには、多くの人々に周知し、理解と協力を得て、実践を積み上げていく必要がある。それを担うのは、本研究で推進委員として研修を積んだ特別支援教育コーディネーターになると思う。本研修で得たものを、各自が所属校での実践に活かし、発展させてほしい。

６　おわりに

「高校でも個別の教育支援計画が活用されていることが分かり、安心した。」本研究に携わった中学校教員の言葉である。これまでも個別の教育支援計画等の引継ぎは行っていたが、中高の関係が希薄で、直接話す機会がなかったため、本当に役に立っているのか半信半疑だったという。この教員が感じた「安心」は、次の実践への自信と意欲につながると思う。本研究を通して構築した中高連携のネットワークを、今後ますます発展させていけるよう、引き続き尽力したいと思う。

小牧市　小学校　個別の教育支援計画 （Face Sheet）

資料１

キミと一緒に、育っていきたい。

Komaki

児童氏名
○　○　○　○

	校　長	印	担　任	印
1年○組				
2年○組				
3年○組				
4年○組				
5年○組				
6年○組				

個別の教育支援計画 (Face Sheet)　作成日　　年　　月　　日　作成者（　　）①

ふりがな	＊＊＊＊＊　＊＊＊＊	生年月日	性別	□男 □女	□右利き □左利き
氏　名	○　○　○　○	年　　月　　日			

家族構成 （同居に○をつける） 祖父　祖母　祖父　祖母 父　母 兄　弟　本人　姉　妹	家庭での様子

生育歴・福祉等	乳児期	
	幼稚園・保育園等	
	あさひ学園	
	放課後デイサービス	

医療・病歴等	□診断名： （　　歳　　）病院で診断 □医療機関：（　　）病院 主治医：（　　先生） 服　薬：（　　） ・ ・	手帳等	□ 療育手帳　A　B　C 年　月取得　更新予定　年　月 □ 身体障害者手帳　種　級 年　月取得　更新予定　年　月 □ 精神障害者手帳　級 年　月取得　更新予定　年　月
心理検査等	□ WISC-Ⅳ 実施：（　年　月　日） 検査担当者（　　） 全検査FSIQ（　　） 言語理解VCI（　　）知覚推理PRI（　　） ワーキングメモリーWMI（　　）処理速度PSI（　　） □ DAM　実施：（　年　月　日）IQ（　　） □ その他	相談機関	学校カウンセラー、市相談員、市支援員、SSW等 ・ ・ ・

その他

保護者の確認　　年　　月　　日　保護者名（　　）＊自署

令和　　年度

年　組	名前		担任	
本人の願い		保護者の願い		
本年度の支援目標				
日頃の様子				
背景情報 （まわりとの関わり）				
頑張れること （本人が得意なこと、好きなこと）				
その他参考になる事柄				
合理的配慮	項目	合理的配慮		

保護者の確認　　年　　月　　日　保護者名（　　）＊自署

●相談記録

月日	記録
／	
／	
／	
／	

●評価

支援の目標について	
合理的配慮を含む 支援の内容について	

●引継ぎ事項（進級・進学・転校）

支援の目標について	
合理的配慮を含む 支援の内容について	
その他	

わたしは、このシートの内容を確認し、（進級・進学先・転学先）へ情報提供することに同意しました。

保護者氏名　　＊自署

小牧市　中学校　個別の教育支援計画 （Face Sheet）

キミと一緒に、育っていきたい。
Komaki

生徒氏名
○　○　○　○

	校　長	印	担　任	印
1年○組				
2年○組				
3年○組				

個別の教育支援計画 (Face Sheet)　作成日　　年　　月　　日 作成者（　　）①

ふりがな	＊＊＊＊＊　＊＊＊＊	生年月日	性別	□男 □女	□右利き □左利き
氏　名	○　○　○　○	年　月　日			

家族構成（同居に○をつける） 祖父　祖母　祖父　祖母 父　母 兄　弟　本人　姉　妹	家庭での様子

生育歴・福祉等	乳児期	
	幼稚園・保育園等	
	あさひ学園	
	放課後デイサービス	

医療・病歴等	□診断名： （　歳　）病院で診断 □医療機関：（　　）病院 主治医：（　　先生） 服　薬：（　　） ・ ・	手帳等	□ 療育手帳　A　B　C 年　月取得　更新予定　年　月 □ 身体障害者手帳　種　級 年　月取得　更新予定　年　月 □ 精神障害者手帳　級 年　月取得　更新予定　年　月
心理検査等	□ WISC-Ⅳ 実施：（　年　月　日） 検査担当者（　　） 全検査FSIQ（　） 言語理解VCI（　）知覚推理PRI（　） ワーキングメモリーWMI（　）処理速度PSI（　） □ DAM　実施：（　年　月　日）IQ（　） □ その他	相談機関	学校カウンセラー、市相談員、市支援員、SSW等 ・ ・ ・

その他

保護者の確認　　年　　月　　日　保護者名（　　）＊自署

令和　　年度

年　組	名前		担任	
本人の願い		保護者の願い		
本年度の支援目標				
日頃の様子				
背景情報 （まわりとの関わり）				
頑張れること （本人が得意なこと、好きなこと）				
その他参考になる事柄				
合理的配慮	項目	合理的配慮		

保護者の確認　　年　　月　　日　保護者名（　　）＊自署

●相談記録

月日	記録
／	
／	
／	
／	

●評価

支援の目標について	
合理的配慮を含む 支援の内容について	

●引継ぎ事項（進級・進学・転校・　　）

支援の目標について	
合理的配慮を含む 支援の内容について	
その他	

わたしは、このシートの内容を確認し、（進級・進学先・転学・　　先　）へ情報提供することに同意しました。

保護者氏名　　＊自署

資料２

支援情報引継ぎ実施要項

令和４年１０月５日
小牧市教育委員会

１　目　的

特別な支援を必要とする児童・生徒が途切れのない支援を受けることができるよう、市内共通の方法で、小学校から中学校、中学校から高等学校へ支援情報の引継ぎを円滑に行う。

２　引継ぎについて

（１）　引継ぎの対象

以下の①～③の全てに該当する児童・生徒を対象とする。

① 小学校、中学校の校内支援委員会において支援が必要とされ、既に保護者の了解のもとに支援を行っている児童・生徒

② 引き継ぎについて保護者の了解が得られている児童・生徒

③ 小牧市内中学校、小牧市内県立高等学校への入学が決定している児童・生徒

（③にのみ該当しない児童・生徒は、入学予定の学校と相談のうえ、引継ぎを行う。）

（２）　引継ぎの方法

① 小学校・中学校が上記の（１）の生徒が進学する中学校・高等学校毎に「支援情報を引き継ぐ児童・生徒の一覧表」（以下、「一覧表」）を作成する。

※　一覧表は、特別支援教育コーディネーター（以下、「コーディネーター」）が、作成するのが望ましい。その際、校内支援委員会にて確認のうえ、保護者の了解を確認する。

② 小学校・中学校の校長に委任を受けた教員が、進学先の中学校・高等学校の管理職（校長、教頭）またはコーディネーターに一覧表を手交する。または、「親展」扱いとし、学校長宛に「書留」等で郵送する。

※　引継ぎは、指導要録等と一緒に行い、対象進学先に送る送付状、受領書にも「支援情報を引き継ぐ児童・生徒の一覧表・個別の教育支援計画〇部」と記載する。

③ 個別の教育支援計画は、原則として保護者が進学先に持参する。保護者の了解を得て小学校・中学校からも進学先に写しを引き継ぐ。

（３）　引継ぎの時期

原則として、小学校は卒業式後、中学校は進学先の決定後から３月末までの間とする。

（４）　保護者の了解

小学校、中学校の関係教員が保護者と面談し、進学先への支援情報の引継ぎについて了解を得ておくことが必要。その際、引き継ぐ個人情報を保護者に提示し、情報が進学先における指導・支援以外には使用されないことを保護者に説明する。

【提示する情報】

・　一覧表（空欄の状態で）

・　個別の教育支援計画及び指導計画（作成されている場合）

・　その他、引き継ぐ予定の資料

＊　了解を得られなかった情報は、一覧表に記載しない。

＊　保護者の了解を得る前に、必ず校長に報告する。

（５）　引継ぎ情報の管理

①　小学校・中学校は、進学先の中学校・高等学校に交付した一覧表等（個別の教育支援計画等添付した資料全て）の写しを、各校の規定に則り適正に管理し、交付先の学校からの照会に対応できるようにする。原則、５年間保存する。

②　中学校・高等学校は、一覧表等を受領する際に、次のようにする。

・　受領書を作成し、交付先に返送する。

・　各校の規定に則り、校長の責任において一覧表等を管理する。

支援を引き継ぐ児童の一覧表

＊卒業式後～３月末日までに中学校へ届けます。

取　扱　注　意

提出先　　中学校

学校名	小牧市立　　小学校
校長名	
担当者名	
電話番号	０５６８－　　－

記入対象は提出先の中学校への進学が決まっている児童のうち、校内委員会で支援が必要と判断され、かつ引き継ぎについて保護者の同意が得られている児童です。不足するようであれば、この用紙をコピーしてください。

No.	名　前	性別	学級種別	①手帳			②個別の教育支援計画	③個別の指導計画	④その他の資料
				療育	身体	精神			
1									
2									
3									
4									
5									
6									
7									
8									
9									
10									

①の欄は所有していたら○　②③④の欄は、作成していたら○

支援を引き継ぐ生徒の一覧表

＊進学先決定後～３月末日までに高等学校へ届けます。

取　扱　注　意

提出先　　高等学校

学校名	小牧市立　　中学校
校長名	
担当者名	
電話番号	０５６８－　　－

記入対象は提出先の高等学校への進学が決まっている生徒のうち、校内委員会で支援が必要と判断され、かつ引き継ぎについて保護者の同意が得られている生徒です。不足するようであれば、この用紙をコピーしてください。

No.	名　前	性別	学級種別	①手帳			②個別の教育支援計画	③個別の指導計画	④その他の資料
				療育	身体	精神			
1									
2									
3									
4									
5									

①の欄は所有していたら○　②③④の欄は、作成していたら○

中学校・高等学校間の引継ぎスケジュール（小牧市モデル）

	中　学　校	高 等 学 校
４月	◆始業式（中学３年生スタート）	◆入学式（新１年スタート）
５月	◆校内教育支援委員会の開催Ⅰ　【１】	◆校内教育支援委員会の開催Ⅰ　【A】 ◆懇談会の実施Ⅰ　【C】
６月	◆小牧市中高連絡会の開催　【２】【B】	
７月	◆懇談会の実施Ⅰ　【３】	◆懇談会の実施Ⅰ　【C】
８月	◆小牧市特別支援教育研修会の開催　【４】【D】 ◆高等学校見学会の開催　【５】【E】	
９月		◆校内教育支援委員会の開催Ⅱ　【A】
10 月	◆校内教育支援委員会の開催Ⅱ　【１】	
11 月		
12 月	◆懇談会の実施Ⅱ　【３】	◆懇談会の実施Ⅱ　【C】
１月	◆懇談会の実施Ⅲ　【３】	
２月	◆校内教育支援委員会の開催Ⅲ　【１】	
３月	◆引継ぎ生徒一覧表の作成　【６】 ◆引き継ぎ資料の整理　【６】 ◆指導要録と共に個別の教育支援計画等の教育支援資料を送付　【７】	◆合格発表 ◆指導要録と共に個別の教育支援計画等の教育支援資料を受領
４月以降随時	◆該当校による情報交換　【８】【F】	◆引継ぎ生徒の保護者と面談　【G】

※【１】～【８】は「引継ぎの概要（中学校）」を参照。A～Gは「引継ぎの概要（高等学校）」を参照。

引継ぎの概要（中学校）【小牧市モデル】

１　校内教育支援委員会の開催（５月、１０月、２月）

・　各中学校において校内教育支援委員会を開催する。
・　校内で個別の教育支援計画の作成状況や引継ぎに関する保護者の考えを確認する。

２　小牧市中高連絡会の開催（６月）

〈主　催〉　小牧市教育委員会
〈参加者〉　小牧市内の全中学校、小牧市内の高等学校より各１名（特別支援教育コーディネーター等）、小牧市教育委員会関係職員
〈内　容〉　個別の教育支援計画等の支援情報を引き継いだ生徒や各学校の様子などについての情報交換を行う。

３　懇談会の実施（７月、１２月、１月）

・　本人・保護者との懇談会を開催し、各期の実態や評価、次期に向けての目標設定を行う。
・　進路先に個別の教育支援計画等の支援情報を引き継ぐメリットについて担任から保護者に丁寧に説明し、引き継ぐ内容について確認する。
・　個別の教育支援計画については、中学校から進路先に写しを送ることを確認する。

４　小牧市特別支援教育研修会の開催（８月）

・　特別な支援を必要とする生徒の支援・指導方法について研修を行う。

５　高等学校見学会への参加（８月）

・　夏休み等に開催される高等学校の見学会に参加する。
・　進学後の学校生活について、高等学校から必要な情報を得る。

６　引継ぎ生徒一覧表の作成と引継ぎ資料の整理（３月）

・　進路先ごとに引継ぎ生徒名簿一覧を作成する。
・　個別の教育支援計画等の支援情報資料を進路先ごとに分類する。

７　指導要録と共に個別の教育支援計画等を送付（３月）

・　保護者の了解を得て、指導要録と共に個別の教育支援計画の写しを進路先に送付する。
・　個別の教育支援計画以外の教育支援資料については、保護者の了解を得たものだけを進路先に送付する。
・　小牧市「成長記録」※は、保護者から進路先に引き継ぐように働きかける。
※　子どもの健やかな成長を願い、発達に関わる情報を集め、支援者との情報伝達・連携をスムーズにするための支援ツール。小学校・中学校の個別の教育支援計画も同じファイルに綴っている。

８　該当校による情報交換（４月）

・　高等学校からの要請を受け、必要に応じて該当中学校・高等学校間で情報交換をする。

引継ぎの概要（高等学校）【小牧市モデル】

A　校内教育支援委員会の開催（５月、９月）

・　各高等学校において校内教育支援委員会を開催する。
・　引継ぎがあった生徒について全職員で確認する。引継ぎ情報を基に該当生徒の支援方法を検討し、全教職員で共通理解を図る。

B　小牧市中高連絡会の開催（６月）

〈主　催〉　小牧市教育委員会
〈参加者〉　小牧市内の全中学校、小牧市内の高等学校より各１名（特別支援教育コーディネーター等）、小牧市教育委員会関係職員
〈内　容〉　個別の教育支援計画等の支援情報を引き継いだ生徒や各学校の様子などについての情報交換を行う。

C　懇談会の実施（５月・７月、１２月）

・　本人・保護者との懇談会を開催し、各期の実態や評価、次期に向けての目標設定を行う。

D　小牧市特別支援教育研修会の開催（８月）

・　特別な支援を必要とする生徒の支援・指導方法について研修を行う。

E　高等学校見学会の開催（８月）

・　夏休み等に学校見学会を開催し、中学生、保護者に情報提供する。
・　学校事情により、７月や１０月に実施する場合もある。

F　該当校による情報交換（４月以降随時）

・　入学後、必要に応じて該当生徒の出身中学校に要請し、情報交換をする。

G　引継ぎ生徒の保護者と面談（４月以降随時）

・　必要に応じて引継ぎ生徒の保護者と面談を行う。
・　生徒の実態・支援方法等について確認し、必要な合理的配慮について合意形成を図る。

参考資料

令和３・４年度特別支援教育体制推進事業

特別支援教育推進モデル事業　中高連携特別支援教育推進校研究委託　実施要綱

令和３年４月
愛知県教育委員会特別支援教育課

１　目的

地域内の中学校と高等学校をモデル研究校として、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒の支援・指導の充実及び支援情報の引継ぎ方法、活用等について研究する。

さらに、その研究成果をまとめ、県内の高等学校、市町村立学校等の教員へ広めることで、指導力の更なる向上を図る。

２　実施内容

（１）支援・指導方法の研究
- 中高連携による支援情報の引継ぎ体制
- 中学校で行っている支援・指導の高等学校への円滑な引継ぎ方法
- 引き継いだ情報の活用方法

（２）研究報告書の作成
- 通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への支援・指導に関するまとめ

（３）研究成果の普及（県が主催する研修との連携）
- 発達障害児等基礎理解推進研修での報告
- 市町村特別支援教育推進者資質向上研修での報告

３　中高連携特別支援教育推進校における支援・指導方法の検証

（１）研究アドバイザーの設置

学識経験者等１名及び愛知県教育委員会職員２名（特別支援教育課１名、高等学校教育課１名）を「研究アドバイザー」として設置する。研究アドバイザーは年間２回、支援拠点校を訪問する他、必要に応じて指導・助言等を行う。

（２）研究アドバイザーの指導・助言について

研究アドバイザーは、支援拠点校における通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への支援・指導方法及び中高連携の在り方等について、次の指導・助言を行う。

ア　通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への支援・指導方法等
イ　中学校及び高等学校における支援情報の引継ぎシステム及び中高連携の在り方

４　研究委託期間

令和３・４年度（単年度実施）

５　研究委託市

小牧市

６　検討委員会

（１）検討委員会について

愛知県教育委員会特別支援教育課は、研究アドバイザーのうち学識経験者等を委員長として、検討委員会を設置する。検討委員会は年間２回程度実施する。

（２）検討委員
- 研究アドバイザー　３名
  （学識経験者１名、愛知県教育委員会職員２名＜特別支援教育課１名、高等学校教育課１名＞）
- 県総合教育センター職員　１名
- 小牧市教育委員会担当者　１名
- 支援拠点校職員　２名
- 特別支援教育課職員　３名

（３）検討する内容について

検討委員会では、支援拠点校における通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への支援・指導方法及び中高連携の在り方等について、次の検討を行う。

ア　通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への支援・指導方法及び中高連携の成果と課題
イ　研究の方向性、まとめ方

中高連携特別支援教育推進校研究　検討委員名簿

氏名	所属等
小倉　靖範	愛知教育大学（准教授）
楠　詩帆	小牧市教育委員会（指導主事）
福嶋　淳代	小牧市立篠岡中学校（校長）
加藤　満明	県立小牧工科高等学校（校長）

（事務局を除く委員のみ、敬称略）